

編 集 後 記

今年の日本の夏は例年にない猛暑であったが、国内外において暑さ、あるいは寒さの異常気象による災害が頻発している。地球全体の生態環境が近年急速に変化してきていることによるものなのであろう。その中で、この日本消化器外科学会雑誌の編集は粛々と継続されており、本年の電子ジャーナル化、Web投稿への変更にも大きな混乱は見られず、毎月多くの投稿をいただいている。本号でも、「大腸穿孔例の術前判定因子と術後合併症の検討」と題した陳らの力作の原著論文のほか、13編もの症例報告が掲載となった。本誌の掲げる基本的な命題は、先日の編集委員会でも再度確認されたところであるが、「和文誌の最高峰を目指す」、「若手の消化器外科医の登竜門」の二つである。各雑誌にはそれぞれ独自の目的・特色などもあるが、本誌と他誌との優劣について論ずるつもりは毛頭ない。ただ、精読される方はお気付きかと思うが、本誌の論文は厳選されたもののみが掲載されており、極めて完成度が高い。それは、編集委員の査読および編集委員会での長時間の審議とともに、その査読コメントに対する投稿者および指導者の先生方の誠意ある加筆修正の努力によるところが大である。今回は、その最終段階でのブラッシュアップについて一つご紹介しておきたい。掲載が決定した20編近くの論文のゲラ刷は毎月、一人の編集委員の元に郵送され、1—2日で、文中の“てにをは”から図表のスペルミス、文献の著者名の誤記に到るまですべて修正されて最終の印刷に回されることになっている。編集委員会の一人のメンバーが慣例的に行ってきた由の膨大なボランティア作業であるが、最近十年は編集委員の安田秀喜先生が一人で担当しておられる。敬服の到りである。このような地道なサポートによって完璧な本誌が毎号できあがっていることをご承知いただき、投稿者の先生方は正確な文章・論文の作成に更にご協力いただければ幸いである。

(富田尚裕)